

高校生の家族受容と家庭科における「家族」学習の捉え方 —「生徒調査」をもとに—

三住 久美子*

1. はじめに

「家族」に関わる学習を広く捉えるならば、学校教育においては家庭科だけではなく「政治・経済」や「現代社会」等においても学ぶ機会はある。しかし「家族や生活の営みを人の一生とのかかわりの中で総合的にとらえ、生活を主体的に営む能力と実践的態度を育てること」¹⁾を学びの目標とする家庭科教育において、「家族」について学習する意義は特に大きいといえよう。家族の機能や実態の学習を通して、家族形態の多様化や現代家族のかえる問題について関心を深めさせ、将来にむけて男女が互いに協力して生活を創造していこうとする意欲へつなげることが大切である。

家庭科における「家族」学習に関しては、特に男女必修化以降の「家族」学習の必要性や学習内容のあり方、自立の視点を重視した学習の必要性、ロールプレイングを用いた学習の実践報告、家族は大切にすべきといった心情主義的授業への批判、「家族」学習においてプライバシーをどう捉えるかといった問題などがこれまでも先行研究として取り上げられてきている²⁾³⁾。本稿は、高校生が現在の定位家族をどのように受容しているのかを捉えることをもとに、家庭科における「家族」学習の課題を導き出そうとするものである。

2. 問題提起

高校生が自分の家族・家庭生活に対して日常的に持っている意識や態度を家族受容と定義し、家族・家庭生活に対する満足度、家族の中での悩み・心配ごとの有無、父親・母親に対する意識等の指標によって捉える。これをもとに高校生の家族受容の状況を大きく肯定的立場（肯定的家族受容）と否定的立場（否定的家族受容）の2つに分類する。肯定的家族受容とは、例えば高校生として現在の家庭生活に満足している、家族の中での悩み・心配ごとがない、父親、母親は、自分のことをよくわかっている、自分にいろいろ話す、自分に対してやさしくあたたかいほうだといった内容である。

否定的家族受容とは、例えば高校生として現在の家族・家庭生活に不満である、家族の中で悩み・心配ごとがある、父親、母親は私の勉強・成績についてうるさく言う、自分に厳しいなどである。

本研究の目的は、こうした高校生の家族受容の実態が家庭科における「家族」学習に対する興味・関心にどのように影響しているかについて明らかにし、そこから「家族」学習の指導上の課題を導きだすことにある。具体的には次のような問題提起を考えている。

1つは、北海道における高校生の家族受容の実態を把握することである。特に都市部と郡部の高校生では家族受容の状況やその内容に相違があるのかどうかを捉える。2つには、そのうち、否定的な家族受容を示す場合について、これが高校生の「家族」学習の好き・嫌いにどのように影響しているかを明らかにする。

* 北海道尚志学園高等学校（非常勤講師）

3. 高校生の家族受容と「家族」学習に関する実態調査

(1) 調査目的・方法

高校生が自分の家族に対して持つ意識や態度、親子関係のあり方の実態と、家庭科における「家族」学習への興味・関心を捉える目的でアンケート調査を実施した。

家族受容の実態を把握する調査項目の作成にあたっては、内閣府「青少年の生活と意識」⁴⁾、日本家庭科教育学会「家庭生活についての全国調査」⁵⁾、内閣府「青少年の社会形成と意識」⁶⁾を参考にした。これらの項目に今回調査ではさらに高校生の「家族」学習に対する好き・嫌いやその理由、興味・関心のある内容等に関する質問項目を追加した。

調査対象は、地域比較のため都市部として札幌市内の高校生 230 名（男子 93 名、女子 137 名）、および郡部として北海道内の 5 市町（空知管内、釧路管内、檜山管内、オホーツク管内、上川管内）の高校生 443 名（男子 191 名、女子 252 名）、合計 673 名である。調査の実施にあたっては、各高等学校の家庭科教員に依頼し、授業時間内にアンケートに記入してもらったため、有効回収率は 100%であった。調査時期は、2011 年 3 月上旬～6 月上旬である。

(2) 調査結果

1) 家族に対する満足感

「家族・家庭生活に対する満足度」については、都市部では約 3 割、郡部では 4 割強が「満足している」と回答した（表 1）。「満足している」と「どちらかといえば満足している」を合わせると、都市部及び郡部の高校生ともに約 8 割弱に達する。

一方、「不満である」と「どちらかといえば不満である」との回答を合わせると、都市部で約 2 割弱、郡部では約 1 割強と、若干前者が上回った。さらに「不満である」と回答した生徒に「家族・家庭生活に対する不満の解決」方法について質問したところ、都市部・郡部ともに「特に何もない」が最も多く、その他「家族ともっと話し合う」などがあげられた。「特に何もない」との回答の背景には、高校生が自ら解決策を導き出せないでいる状況が推測された。

つぎに「今まで家族から離れたいと思ったことはあるか」については、都市部では「自由に生活したかったから」「自立しなければいけないと自分が感じたから」「離れたいと思ったことはない」「進学を機会に離れたいと思った」の順であった（表 2）。

表 1 家族・家庭生活に対する満足度

項目	都市部		郡部	
	実数	%	実数	%
満足している	71	30.9	190	42.9**
どちらかといえば満足している	105	45.7*	164	37.0
どちらかといえば不満である	25	10.9	36	8.1
不満である	12	5.2	17	3.8
わからない	17	7.4	34	5.4
N. A.	0	0.0	2	0.5
計	230	100.0	443	100.0

χ^2 : ** p<0.01, * p<0.05

表 2 家族から離れたい理由 (M. A)

項目	都市部		郡部	
	実数	%	実数	%
自由に生活したかったから	57	24.8	97	21.9
自立しなければならぬと自分が感じたから	37	16.1	133	30.0
離れたいと思ったことはない	35	15.2	141	31.8
進学を機会に離れたいと思った	24	10.4	17	3.8
その他	7	3.0	102	23.0
親から「家を出るように」と言われたから	5	2.2	19	4.3
N. A.	65	28.3	0	0.0
計	230	100.0	443	100.0

郡部では、「離れたい思ったことはない」が最も多く、「自立しなければいけないと自分が感じたから」「自由に生活したかったから」の順であった。郡部に「その他」が多かったのは、選択肢のみに印をつけ具体的な内容が記述されていないものであった。一方で都市部に「NA」が多かったのは、高校生が漠然とは家から離れたいとは思っているものの、強いて理由を問われると選択肢には該当しなかったようであり、明確に自立を考えている段階というよりは、やがては家族から離れるであろうと将来予測はしている程度と判断できよう。

「現在の家族の中での悩み・心配ごとはあるか」について自由記述してもらった結果は、都市部・郡部ともに「特になし」が8割以上を占めた（表3）。一方、悩み・心配ごとの具体的な記述がみられたもののうちでは、都市部・郡部ともに「親との意見のくいちがい」が多く、さらに都市部では「親同士の会話のなさ」が、郡部では「経済的な問題」が地域的な傾向として指摘できよう。

表3 家族の中での悩み・心配ごと

項目	都市部						郡部					
	男		女		小計		男		女		小計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
兄弟関係	1	1.0	2	1.4	3	1.3	3	1.5	7	2.7	7	1.6
親との意見のくいちがい	5	5.3	5	3.6	10	4.3	10	5.2	14	5.5	24	5.4
家族の病気	2	2.1	1	0.7	3	1.3	1	0.5	1	0.3	2	0.5
経済的な問題	1	1.0	3	2.1	4	1.7	2	1.0	6	2.3	8	1.8
親同士の会話のなさ	1	1.0	4	2.9	5	2.2	0	0.0	1	0.3	1	0.2
規律が厳しい	1	1.0	3	2.1	4	1.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0
自分がわがまま	1	1.0	2	1.4	3	1.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0
夫婦げんか	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	1.0	2	0.7	4	0.9
その他	4	4.3	4	2.9	8	3.5	5	2.6	4	1.5	9	3.2
特になし	77	82.7	113	82.4	190	82.6	168	87.9	220	87.3	388	87.4
計	93	100.0	137	100.0	230	100.0	191	100.0	252	100.0	443	100.0

2) 親についての意識

「父親・母親についてどう思っているか」については、都市部では父親との肯定的な関係としては、「私にやさしい」「私は親の仕事をよく知っている」「私にいろいろ話す」「私のことをよくわかっている」の順であった（表4）。これに対して父親との否定的な関係としては、「私に対して厳しい」「私の勉強について、うるさい」であった。母親との肯定的な関係としては、「私にいろいろ話す」「私にやさしい」「私は親の仕事をよく知っている」の順であった。これに対して母親との否定的な関係としては、「私の勉強について、うるさい」「私に対して厳しい」の順であった。

郡部では、父親との肯定的な関係としては、「私は親の仕事をよく知っている」「私にやさしい」「私にいろいろ話す」「私のことをよくわかっている」があげられた。これに対して父親との否定的な関係では、「私に対して厳しい」「私の勉強について、うるさい」

表 4 親についての意識 (M. A)

項目	都市部				郡部			
	父親		母親		父親		母親	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
私に対して厳しい	37	16.1	42	18.2	77	17.4	93	21.0
私のことをよくわかっている	32	13.9	84	36.5	107	24.2	206	46.5**
私の勉強について、うるさい	35	15.2	70	30.4	66	14.9	141	31.8**
私にいろいろ話す	64	27.8	145	63.0**	146	33.0	226	51.0
私にやさしい	87	37.8**	102	44.3	149	33.6	181	40.9
私は親の仕事をよく知っている	69	30.0	94	40.8	161	36.3	192	43.3
親の人生は、私からみて生きがい	32	13.9	40	17.3	82	18.5	130	29.3*
この中にはない	36	15.6	13	5.6	71	16.0**	39	8.8
わからない	32	13.9	17	7.3	81	18.3*	58	13.1
計	230	100.0	230	100.0	443	100.0	443	100.0

 χ^2 : ** p<0.01, * p<0.05

の順であった。母親との肯定的な関係としては、「私にいろいろ話す」「私にやさしい」「私は親の仕事をよく知っている」の順であった。これに対して母親との否定的な関係では、「私の勉強について、うるさい」「私に対して厳しい」の順であった。

都市部と郡部で有意な差がみられたのは、都市部における父親の「私にやさしい」と、母親の「私にいろいろ話す」であり、郡部における父親の「この中にはない」「わからない」と、母親の「私のことをよくわかっている」「私の勉強について、うるさい」「親の人生は私からみて生きがい」であった。郡部における父親に対する意識のうち、「この中にはない」と「わからない」とする回答の背景には郡部の高校生の父親に対する意識の複雑さが推測された。

父親・母親別にみると、高校生にとって母親は「私の勉強について、うるさい」一方で、「私のことをよくわかっている」とか「私にいろいろ話す」存在であり、高校生は父親より母親との関係を肯定的に受容する傾向が強いと考えられた。

3) 親の期待

「親があなたの将来について、期待をもっていることはどのようなことか」について自由記述してもらった結果は、都市部・郡部ともに「特になし」が半数近くを占め、親子関係における会話や親密度の低さが感じられた(表5)。

都市部と郡部を男女別にみると、都市部の女子では、「大学に進学すること」「楽しく幸せに暮らすこと」「結婚すること」があげられ、男子では、「高収入を得ること」「楽しく幸せに暮らすこと」があげられた。郡部の女子では、「就職すること」「夢を実現すること」があげられた。郡部の男子に「わからない」が多くみられたのは、親の期待がないのか、親の期待が伝わってこない、あるいは親の期待と自分が考えている将来設計の一致が難しい状況にあるのかといった複雑な状況が推測された。

表5 親の期待（男女別）－上位10項目－

項目	都市部				郡部				男女計				総計	
	男		女		男		女		男		女			
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
特になし	43	46.2	63	45.9	86	45.0	126	50.0	129	45.3	189	48.5	318	47.3
就職すること	9	9.6	19	13.8	20	10.4	40	15.8	29	10.2	59	15.1	88	13.1
自立すること	11	11.8	5	3.6	18	9.4	14	5.5	29	10.2	19	4.8	48	7.1
夢を実現すること	1	1.0	7	5.1	10	5.2	23	9.1	4	1.4	30	7.7	34	5.1
高収入を得ること	9	9.6	3	2.1	6	3.1	6	2.3	15	5.2	9	2.3	24	3.6
期待はされていない	0	0.0	1	0.7	4	2.0	2	0.7	16	5.6	3	0.7	19	2.8
大学に進学すること	2	2.1	12	8.7	0	0.0	4	1.5	2	0.7	16	4.1	18	2.7
楽しく幸せに暮らすこと	7	7.5	10	7.2	9	4.7	4	1.4	0	0.0	14	3.5	14	2.1
結婚すること	0	0.0	5	3.6	1	0.5	2	0.7	1	0.3	7	1.7	8	1.2
その他	11	11.8	12	8.8	7	3.7	6	2.3	18	6.3	18	4.6	36	5.4
わからない	3	3.2	0	0.0	30	15.7	26	10.3	33	11.6	26	6.6	59	8.8

4) 将来の考え方、生き方

「将来の考え方、生き方」については、都市部では「年齢よりも、実績によって給与が決められる方がよい」が女子に有意差がみられ、「私生活を犠牲にしてまで、打ち込むつもりはない」が男子に有意差がみられた。ついで「収入に恵まれなくても自分のやりたい仕事をしたい」「自分の将来について楽観的なイメージを持っている」の順であった（表6）。郡部では「高校を卒業したら、できるだけ早く就職して、親から経済的に自立すべきだ」が最も多く、ついで「収入に恵まれなくても自分のやりたい仕事をしたい」「年齢よりも、実績によって給与が決められる方がよい」「私生活を犠牲にしてまで、打ち込むつもりはない」の順であり、いずれも有意差はみられなかった。この結果からは都市部よりも郡部の高校生に卒業後に親から経済的に自立しようとする意識が強い傾向がみられた。なお、男女別の有意差はみられなかった。

5) 家庭生活での役割・民法改正案について

「家庭生活で主にどんな役割を担っているか」については、都市部では「自分の部屋を掃除する」「風呂を掃除する」「食器を洗う」の順であった（表7）。郡部では「自分の部屋を掃除する」「買い物を手伝う」「風呂を掃除する」の順であった。

男女別では、「自分の部屋を掃除する」「風呂の掃除をする」が都市部の男子と郡部の女子に多く、有意差がみられた。さらに都市部の女子では「食器を洗う」「食卓に食器を並べる」「兄弟姉妹の世話をする」に有意差がみられ、郡部の男子では「高齢者の世話をする」「家業を手伝う」に有意差がみられた。この結果から、郡部の高校生は、高齢者とともに生活する大家族や自営業世帯が多く、都市部の高校生よりも家族との関係が深いといえるし、「家族」学習の効果もその分期待できると思われた。

全体的には、「自分の部屋の掃除」以外の項目について、都市部よりも郡部の高校生の家事役割分担の割合が上回っていた。

最後に、高校生が将来家族を形成する際に大きく影響を及ぼすであろう民法改正案につ

表6 将来の考え方、生き方(M.A)

項目	都市部						郡部					
	男子		女子		小計		男子		女子		小計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
高校を卒業したら、できるだけ早く就職して、親から経済的に自立すべきだ	25	26.9	41	29.9	66	28.7	97	50.8	122	48.4	219	49.4
年齢よりも、実績によって給与が決められる方がよい	33	35.5	65	47.4**	98	42.6	58	30.4	82	32.5	140	31.6
収入に恵まれなくても自分のやりたい仕事をしたい	39	41.9	47	34.3	86	37.4	87	45.5	85	33.7	190	42.9
私生活を犠牲にしてまで、仕事に打ち込むつもりはない	43	46.2*	46	33.5	89	38.7	55	28.8	79	31.3	134	30.2
将来のために節約・努力するよりも、今の自分の人生を楽しむようにしている	29	31.2	37	27.0	66	28.7	53	27.7	58	23.0	111	25.1
自分の将来について楽観的なイメージを持っている	31	33.3	39	28.5	70	30.4	41	21.5	61	24.2	102	23.0
収入が高くななくても、家から近いところでの仕事がよい	5	5.4	9	6.7	14	6.1	22	11.5	20	7.9	44	9.9
わからない	7	7.5	7	5.1	14	6.1	15	7.9	16	6.3	31	7.0
この中にはない	6	6.5	10	7.3	16	7.0	10	5.2	14	5.5	24	5.4
計	93	100.0	137	100.0	230	100.0	191	100.0	252	100.0	443	100.0

 χ^2 : ** p<0.01, * p<0.05

表7 家庭生活で主にどんな役割を担っているか (M.A)

項目	都市部						郡部					
	男		女		小計		男		女		小計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
自分の部屋を掃除する	73	78.4*	106	77.3	179	77.8	137	71.7	200	79.3*	337	75.4
洗濯をする	12	12.9	27	19.7	39	16.9	34	17.8	83	32.9	117	26.4
食器を洗う	18	19.3	57	41.6**	75	32.6	53	27.7	118	46.8	171	38.6
食卓に食器を並べる	16	17.2	56	40.8**	72	31.3	50	26.1	119	47.2	169	38.1
自分の衣服にアイロンをかける	4	4.3	14	10.2	18	7.8	11	5.7	36	14.2	47	10.6
トイレ掃除をする	0	0.0*	10	7.2	10	4.3	10	5.2	30	11.9	40	9.0
風呂を掃除する	43	46.2**	38	27.7	81	35.2	73	38.2	109	43.2	182	41.1
炊事をする	9	9.6	23	16.7	32	13.9	42	21.9	83	32.9	125	28.2
買い物を手伝う	24	25.8	45	32.8	69	30.0	74	38.7	140	55.5	214	48.3
兄弟姉妹の世話をする	17	18.2	12	8.7*	29	12.6	33	17.2	63	25.0	96	21.7
高齢者の世話をする	1	1.0	1	0.7	2	0.8	10	5.2**	11	43.6	21	4.7
家業を手伝う	10	10.7	10	7.2*	20	8.6	39	20.4**	48	19.0	87	19.6
その他	5	5.3	8	5.8	13	5.6	7	3.6	14	5.5	21	4.7
計	93	100.0	137	100.0	230	100.0	191	100.0	252	100.0	443	100.0

 χ^2 : ** p<0.01, * p<0.05

いて質問した。「民法改正案の『同姓または別姓を選択できる』についてどう思いますか」については、「わからない」が最も多く、とくに郡部では過半数を占めた（表8）。

「賛成」は、都市部では約4割弱、郡部では約3割弱であり、都市部・郡部ともに男子よりは女子の「賛成」が上回っていた。

表8 民法改正案「同姓または別姓を選択できる」について

項目	都市部						郡部					
	男		女		小計		男		女		小計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
賛成	29	31.1	57	41.6**	86	37.4	45	23.6*	65	25.8	121	27.3
反対	24	25.8	24	17.5	48	20.9	48	25.1	49	19.5	96	21.7
わからない	40	43.0	56	40.8*	96	41.7	98	51.3	138	54.7	226	51.0
計	93	100.0	137	100.0	230	100.0	191	100.0	252	100.0	443	100.0

χ^2 : ** p<0.01, * p<0.05

6) 「家族」学習の好き・嫌い

「家族」学習の好き・嫌いについては、都市部では「好き」が過半数を占め、「嫌い」は3割程であった（表9-1）。好きな理由は、「家族の生活を振り返ることができた」「楽しかった」などであった（表9-2）。一方、嫌いな理由として「家族のことを考えるのがいや」に有意差がみられ、その他は「家族というものがあまり好きでない」などであった（表9-3）。

郡部の男子に「好き」が多く有意差がみられた。好きな理由は、「家族の生活を振り返ることができた」「役に立つから」「楽しかった」など都市部と同じ内容であった。一方、「嫌い」にも有意差がみられた。その理由は、「勉強しなくてよいと思う」に有意差がみられ、その他の理由としては、「興味がない」「難しい」などがあげられた。

「『家族』学習のうち興味関心ある内容」を複数あげてもらったところ、都市部では、「さまざまな家族のあり方」「家族に関する法律」「家族の人間関係」「家族と生活設計」「家族の役割」「家族形態」の順であった（表10）。

表9-1 「家族」学習の好き・嫌い

項目	都市部						郡部					
	男		女		計		男		女		計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
好き	50	53.7	70	51.0	120	52.1	88	46.0*	153	60.7	241	54.4
嫌い	36	38.7	35	25.3	71	30.9	73	38.2*	79	31.3	152	34.3
N.A.	7	7.6	32	23.6	39	17.0	30	15.8	20	8.0	50	11.3
計	93	100.0	137	100.0	230	100.0	191	100.0	252	100.0	443	100.0

χ^2 : ** p<0.01, * p<0.05

表 9-2 「家族」学習が好きな理由

好きな理由	都市部		郡部	
	実数	%	実数	%
役に立つから	15	12.5	36	14.9
疲れないから	2	1.7	1	0.4
嫌いではない	11	9.2	19	7.9
家族の生活を振り返ることができた	23	19.2	27	11.2
自分に関わる	3	2.5	5	2.1
生活を学べる	7	5.8	13	5.4
楽しかった	15	12.5	28	11.6
家族が好き	4	3.3	15	6.2
N. A.	40	33.3	97	40.2
計	120	100.0	241	100.0

表 9-3 「家族」学習が嫌いな理由

嫌いな理由	都市部		郡部	
	実数	%	実数	%
興味がない	7	9.8	20	13.1
家族というものがあまり好きではない	8	11.3	11	7.2
やる意味がわからない	2	2.8	9	5.9
忘れるから	4	5.6	7	4.6
勉強しなくてよいと思う	3	4.2	20	13.1*
面倒くさい	5	7.0	4	2.6
おもしろくない	3	4.2	7	4.6
難しい	4	5.6	12	7.9
家族のことを考えるのが嫌	10	14.1**	5	3.3
当たり前のことだから	3	4.2	10	6.6
役に立たない	2	2.8	4	2.6
N. A.	20	28.2	43	28.3
計	71	100.0	152	100.0

 χ^2 : ** p<0.01, * p<0.05

注: Q10 で「嫌い」と回答した者のうち。

表 10 「家族」学習のうち興味・関心がある内容 (M. A)

項目	都市部		郡部	
	実数	%	実数	%
さまざまな家族のあり方	53	23.0	137	30.9
家族に関する法律	42	18.3	87	19.6
家族の人間関係	42	18.3	128	28.9
家族と生活設計	32	13.9	57	12.7
家族の役割	30	13.0	118	26.6**
家族形態	29	12.6	60	13.5
家庭生活と労働	26	11.3	69	15.6
家族・家庭の意義	24	10.4	41	9.3
家族と男女共同参画社会	21	9.1	46	10.4
家族と社会保障	19	8.3	35	7.9
家族と家庭と地域社会	10	4.3	28	6.3
その他	14	6.1	16	3.6
計	230	100.0	443	100.0

 χ^2 : ** p<0.01, * p<0.05

郡部では、「さまざまな家族のあり方」「家族の人間関係」「家族に関する法律」「家族の役割」「家族形態」「家族と生活設計」の順であった。とくに郡部では「家族の役割」が多く有意差がみられた。

4. 考察—家族受容の状況と「家族」学習の好き・嫌い—

高校生の家族受容の実態と「家族」学習の好き・嫌いとの関連について考察する。肯定的家族受容として、「家族・家庭生活に満足している」と回答した者について、「家族」学習の好き・嫌いをクロス集計した結果には有意差はみられなかった（表11-1）。また父親・母親との関係において、親は「私のことをよくわかっている」と回答した者について、「家族」学習の好き・嫌いをクロス集計した結果にも有意差はみられなかった（表11-2）。

次に「現在の家族の中での悩み・心配ごとはない」と回答した者と「家族」学習の好き・嫌いをクロス集計した結果は、郡部の女子において肯定的家族受容を示しているにもかかわらず「家族」学習が嫌いとする回答に有意差がみられた（表11-3）。したがってこの結果からは、家族の受容状況と「家族」学習の好き・嫌いとの関連性は認められず、「家族」学習が嫌いとする要因は別にあると考えられる。今後、「家族」学習の指導法との関連を研究する必要がある。

これに対して否定的家族受容として、「現在の家族の中での悩み・心配ごとがある」と回答した者について、「家族」学習の好き・嫌いをクロス集計した結果にも有意差はみられなかった（表11-4）。ただし強いていえば「家族の中での悩みや心配ごとがある」とする都市部及び郡部の男子の過半数が「家族」学習が嫌いであり、女子は都市部では約4割強が「家族」学習が嫌いと回答した。郡部の女子では「家族の中での悩み・心配ごとがある」と回答した者の過半数が「家族」学習が好きと回答しており、家族に悩みや心配ごとがあるからなおさら興味を持って学習したとも考えられる。

5. 結論

以上の結果から、家族受容の実態としては都市部・郡部ともに約8割の高校生が自分の現在の家族・家庭生活に満足していた。これに対して不満であるとの回答は、都市部で約2割弱、郡部では約1割強と、若干前者が上回った。

現在の家族の中での悩み・心配ごとについても、都市部・郡部ともに約8割が「特になし」であった。一方、悩み・心配ごとがある場合その具体的な内容としては、都市部・郡部に共通して「親との意見のくいちがい」があげられ、進路希望や生活観などでくいちがいが生じやすい高校時代の特徴が現れている。その他としては都市部では「親同士の会話のなさ」が、郡部では「経済的な問題」が地域的な相違として明らかになった。

親子関係については、都市部では父親はやさしく、母親は私にいろいろ話す存在であり、郡部では、母親は自分のことをよくわかってくれている一方で、勉強についてうるさい存在として捉えられていた。特に郡部においては、職業の継承や経済的な問題を背景にして父親との関係に複雑さが推測された。この点は親から自分に寄せられる期待についても同様であり、郡部の男子は「高校を卒業したらできるだけ早く就職して、親から経済的に自立すべきだ」と考えている一方で、親の期待を十分には把握できていない、もしくは親の期待と自分の希望が一致しない状況があるのではないかと推測された。

否定的な家族受容を示した場合の「家族」学習の好き・嫌いについては特に有意差はみられなかった。しかし都市部の男子において否定的家族受容を示した場合に「家族」学習

表 11-1 家族・家庭生活に対する満足感と「家族」学習の好き・嫌い

項目	家族・家庭生活に満足している			
	都市部		郡部	
	実数	%	実数	%
「家族」学習が好き	46	64.8	120	63.1
「家族」学習が嫌い	17	23.9	42	22.2
N. A.	8	11.3	28	14.7
計	71	100.0	190	100.0

表 11-2 親は「私のことをよくわかっている」と「家族」学習の好き・嫌い

項目	親は「私のことをよくわかっている」							
	都市部				郡部			
	父親		母親		父親		母親	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
「家族」学習が好き	22	68.7	49	58.4	62	57.9	131	63.5
「家族」学習が嫌い	3	9.5	20	23.8	30	28.0	51	24.8
N. A.	7	21.8	15	17.8	15	14.1	24	11.7
計	32	100.0	84	100.0	107	100.0	206	100.0

表 11-3 「現在の家族の中での悩み・心配ごとがない」と「家族」学習の好き・嫌い

項目	家族の中での悩み・心配ごとがない											
	都市部						郡部					
	男		女		小計		男		女		小計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
「家族」学習が好き	45	58.5	62	54.8	107	56.3	88	52.3	121	55.0	209	53.8
「家族」学習が嫌い	30	38.9	19	16.9**	49	25.8	50	29.8	79	35.9*	129	33.2
N. A.	2	2.6**	32	28.3**	34	17.9	30	17.9	20	9.1**	50	13.0
計	77	100.0	113	100.0	190	100.0	168	100.0	220	100.0	388	100.0

 χ^2 : ** p<0.01, * p<0.05

表 11-4 「現在の家族の中での悩み・心配ごとがある」と「家族」学習の好き・嫌い

項目	家族の中での悩み・心配ごとがある											
	都市部						郡部					
	男		女		計		男		女		計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
「家族」学習が好き	3	18.7	9	37.5	12	30.0	6	26.0	17	53.1	23	41.8
「家族」学習が嫌い	8	50.0	10	41.6	18	45.0	13	56.5	11	34.3	24	43.6
N. A.	5	31.3	5	20.8	10	25.0	4	17.5	4	12.5	8	14.6
計	16	100.0	24	100.0	40	100.0	23	100.0	32	100.0	55	100.0

が嫌いとする割合が過半数を占めた。その理由としては「家族のことを考えるのが嫌」とか「家族というものがあまり好きではない」「興味がない」からであった。また郡部では「家族」学習をあえて「勉強しなくてもよい」「興味がない」との回答がみられた。

「家族」学習への興味関心は家庭科という教科が高等学校においてどのように位置づけられているかによっても大きな影響を受けている。受験科目ではないため軽視されがちな家庭科ではあるが、高校生という年代であるからこそ「家族」学習の意義は大きい。また「家族」学習は、家族の中での自分の位置や役割を確認するための有効な題材であるにもかかわらず、教師からの学習目標や意義についての提示が不十分であったり、指導方法の研究が不足していることからその重要性が生徒に伝わりづらいといった状況もあると考えられる。自分の家族に対する悩み・心配ごとをかかえている高校生にとってこそ、「家族」学習によって多様な家族のあり方を理解し、それをとおして現実の自分の家族を客観視することが可能になり、さらに学習によって得た知識や理解を将来の創設家族に向けての意欲的な態度につなげていくことが大切であろう。

最後に、高校生の家族受容の状況、特に否定的な家族受容と「家族」学習の好き・嫌いとの関わりに関しては、今回のような量的調査では詳細な内容を捉えることには限界があった。今後は「家族」学習を指導する教師側の問題点と合わせて実践的な研究を進めていきたい。

謝辞

本調査にご協力いただいた高校生の皆様及び各校の家庭科ご担当の先生方に心より御礼申し上げます。

なお、本報告は、藤女子大学大学院人間生活学研究科（人間生活学専攻）2011年度修士論文の一部を再構成し、まとめたものである。

注

- 1) 文部科学省：高等学校学習指導要領解説 家庭科編, p.7, 開隆堂, 2010 年。
- 2) 山田綾：高等学校の授業実践の特徴と課題, 現代家族学習論, p.145～147, 朝倉書店, 1992 年。
- 3) 鈴木敏子：「家族」をどうとらえたらいいのだろうか, 衣食住学びのリニューアル, p.55～59, 明治図書, 2004 年。
- 4) 内閣府：日本の青少年の生活と意識（第2回調査）, p.52～75, 2001 年。
- 5) 青木幸子：高等学校家庭科の授業づくり, 中間美砂子, 家庭科教育法, p.148, 建帛社, 2007 年。
- 6) 内閣府：青少年の社会形成と意識, p.32～34, 2004 年。